

BOOK REVIEW

コメディカルのための邪道な脳画像診断養成講座

大学の教員をしていると、「難しいことをわかりやすく教える」というのは永遠の課題です。しかも、多くの医療従事者が苦手としている「脳画像診断」について、面白く、かつ最後まで興味を引き付けながら教えるというのは至難の業だと思っていました。しかし、この本に出合って、「世の中には画像診断について一気に読ませてしまうほどの本を書く才能のある人がいる」と驚嘆しました。

学会に行くと会場の書籍コーナーで新刊を手取るのが楽しみです。この本は強烈に目に飛び込んできたのを覚えています。まず、「邪道な…」という思いっきり振り切った書名に驚かされました。手に取ってみるとこれまた、イラストというすましたものではなく、「クワッ」など擬音語が飛び交う漫画と脳画像と説明がページをぎっしり埋めている不思議な世界。医学書の既成概念から抜けられない人は、この時点で本を戻してしまうかもしれません。

しかし、内容を読んでいくと画像診断の基本的なところから症例まで丁寧に説明してあります。こわもての医師が新人の落ちこぼれそうなナースに問答を繰り返しながら教えていくというストーリー仕立てで臨場感があります。

本編では画像診断養成講座として 12 講

座、① 破壊された脳の「量の原理とは」、② MRI、③ CT、④ 認知症、⑤ 脳梗塞、⑥ 脳出血、⑦ くも膜下出血、⑧ 脳外傷、⑨ 脳腫瘍、⑩ 水頭症と脳ヘルニア、⑪ Treatable dementia とアイウエオチップス、⑫ CT/MRI で白黒つかないモノ：(非器質性) 精神疾患編など、画像の見方について基礎から説明が進んでいきます。

軽妙なストーリーの中で、医学的な内容がきっちり押さえられているので、まさに楽しみながら勉強できる仕組みになっています。特別編で MRA などさらに画像の理解を深め、疾患各論編では 15 の症例を通して画像と症状の関係が学べます。

著者は、「CT・MRI 画像で正常な脳がどれだけ残っているか評価できれば、患者さんの社会復帰のための潜在能力(のびしろ)を予想するのには十分に役に立ちます」と述べています。

これまで、脳画像にアレルギー反応を起こしていたような方も、「難しいと思っていたことがスッキリわかることの喜び」を味わっていただけたと思います。そして、日々の臨床で患者さんの評価・アセスメントに脳画像で得られる情報を生かすために、ぜひ一読と言わず、手元に置いて繰り返し読むことをお勧めします。



● 梗間 剛=原作,
仙道ますみ=まんが

(B5/100頁/1,800円+
税/三輪書店/2016年)

▼ 評者

小園真知子

熊本保健科学大学リハビリテーション学科
言語聴覚学専攻 教授,
言語聴覚士